





「わあ、テントウムシといっしょに、行くことにしたの、いいなあ」

キツキがいうと、

「ぼくも、てっぺんつくろ」

とクックが上をむいた。

「おれも、おれのとっぺんから、テントウムシ飛ばしてみてえな」

セッセも、てっぺんをつくっていた。

「テントウムシって、テントだけじゃなくて、どのテントウムシも、みんなてっぺんから飛び立ちたがるのかなあ」

キツキがいった。

「おれ、テントウムシが、カヤの葉<sup>は</sup>のてっぺんから飛び立つの見た」

セッセが、ゆびでてっぺんをつくっていった。

「ぼく、ぼうのとっぺんまでのぼつたのに、また、もどってきちゃったテントウムシ見たことある。きつと、こわがりのテントウムシだね」

クックがわらった。

「きつと、テントウムシだって、いろんなのがいるよね。クックがいうように、こわがりのテントウムシとか、飛ぶのがすきじゃないテントウムシとか、たいらなところから飛ぶれんしゆうをしているテントウムシとか」

キツキが、トガリイじいさんの顔をのぞきこんだ。

バッタが大声でどなった。  
「ぶれいもの、ぶれいもの」  
バッタはよこになったまま、わしをふりおとそうと、足をバツタバツタさせた。せっかくつかまえたごちそうを、そうかんたんににがしてなるものか。わしは両手両足で、しっかりとバッタにしがみついた。  
「ぶれいもの。なにものだ」  
バッタは大声でさけぶと、体をたてなおし、うしろ足で地面をつよくつけた。わしとバッタは、草の中をななめにぬけて、空中にとびだした。わしを背おっているのにたいした力だ。

だが、わしの足がじゃまになって、バッタの羽が半分でかかったままひらかない。わしとバッタは、また草むらの中へつつこんだ。

「トノサマバッタのトノサマは、トノサマの中のトノサマであるぞ」

バッタは、エノコログサにしがみついてさげんだ。

気づかれないように、わしはバッタのうしろからそっと近づいた。太った体のかげになって、バッタにはわしが見えないらしい。わしは思いきりジャンプをして、バッタの背中にとびついた。  
いきおいあまって、わしとバッタは地面にころがりおちた。

「ぶれいもの。なにをする。おれさまは、トノサマバッタのトノサマであるぞ」



